

〈資料紹介〉

石橋和訓畫伯小伝 二

眞住貴子

明治二十九年八月下旬・画伯二十一歳にして・斯る大望を懐きつつ・行李匆々にし・京都に向ひたり・着京取り敢へず・三條小橋の亀屋旅館に投宿・明日よりの運動方針に就き研究したり

兎に角當面の目的にあらずとも・妙法院の方より運動を起さんと決意し・之を訪問せしが・門跡不在なりとて面會を得ず・翌日より根氣克く四五回に涉りて訪問・漸くにして面會を許されたり・玄關より門跡の居室に至るまで・數十の室を通過せしに・其両側には幾十人の小僧又は僧都・威儀を正して居並び・其容態甚た物々し・然るに愈々門跡の面前に通され・一禮をなして之を仰き見しに・最初の日玄關に頭はれし・取次の使僧こそ門跡其人なりしには・一驚を喫したり

村田門跡は・画伯の希望を詳悉傾聴したる上・其熱誠に感激して・悉く其来意を諒承せられたり・加之其所志を貫徹するまでは・當寺内の一室に寄寓して・運動せられ度しと・いと懇に勧告せられたる後・京都附近及び奈良方面に於ける・古社寺に秘藏せらるる・古畫類に關し詳細の記憶を打漏らされたるは・實に感銘する所なりと・其後画伯は屢々之を繰返し居たり

數日後村田門跡の紹介状を得て・知恩院門跡に申入れしも・蝦蟇・鉄捌両仙人画幅(1)は・他見を許し難しとて拒絶せられたり・之を村田門跡に報告せし結果・再び添書を得て西本願寺に至り・大谷光尊上人に面會乞ひしが・曩日妙法院に於けるが如く・容易に面會を許されず・數回歩を運びたる後・辛うじて面接の機を捉らへ・詳細希望を開陳したるに・上人も画伯の熱誠に動かされ・知恩院への依頼状を與へられたり・然るに知恩院に於ける同画幅は・勅封に準じたる扱振りとなり居り・宮内省の許可証を持参せされば・如何に上人或は村田門跡の依頼たりとも・内規に反することは・不可能なりと始めて其理由を説明せられたり

是に於て画伯は・此旨を詳悉して・東京の松平伯千家男に報告し・援助を懇請したりければ・男爵よりは・時の宮内大臣山縣有朋公に申出て・認可証を得て・之を画伯の許に郵送せられたり・画伯之を得て勇躍・殆んど鬼の首を獲たる心地して・其翌日之を知恩院に持参し・三日間に涉りて・毎日二時間づつの内見制限を・傍目も振らず努力を拂ひつつ・茲に遺憾なく之を模寫し了りたり

此時の画伯の心中・實に得意満幅たるものあり・其上恩師和亭翁の

宿望をも達し得て・御恩報しの一端ともなる譯なり・其模寫中夫々運筆の妙技をも味ひ得たる事とて・自己研鑽の幫助ともなり・之に依て遽かに筆力の雄健を加へたるかの感を與へたり

然るに画伯が・京都下向の第二の目的としては・東山二尊院に在る・張思恭（2）筆中央釋迦牟尼・両脇文珠菩薩と・普賢菩薩との三幅對古画をも・内見模寫せんとするに在りたり・是も亦曩の知恩院寶物の如く・其手續極めて至難なるべしと・豫想したりしに・既に彼の二大寶物内見の認可を得置きし事とて・二尊院に於ては・苦もなく内見を許され・是も三四回の模寫にて・完全に其運筆の模造を了へたり

斯の如くして画伯が・今回の二大目的は・立派に達成し得たるも・尚進んで古美術の●叢たる・京都及び奈良の秘藏古画類を研究せんと・所々を漁り行く中に・彼の知恩院秘藏の顔輝筆と・同じ画柄の蝦蟇・鉄捌両仙人の画幅が・京都愛宕郡田中村の・百萬遍什物中にもありと・傳聞したる画伯は・孰れ是はし相當手腕ある古画家の・模寫に係るものなるべし・然る時は其模寫の手法を・研究参考して・大に自家習修の資に供せんものと思ひ立ちたり・研究心に燃ゆる画家としては・決して無理ならざる・要求といふべし

依て此百萬遍秘寶をも・内見模寫の手蔓を得んものと・之に對する運動方法を開始したり・干時明治二十九年十一月廿七日・先づ田中村に辿り着きて・百萬遍を訪れしも空漠として容易に其端緒を得難

く・呆然として寺内の隈々を徘徊したる後・意を決して末寺養源院に至り・其住持上野勇成師に面會して・其所藏の有無と・之を内覽するの手續きとを・詳しく聞取り置き・其翌日二尊院の片岡師を訪ひ・同道の上其志望に口添せられんことを哀願し・共に百萬遍に至りて・末寺瑞林寺井手良孝師を訪ひたり・井出氏は百萬遍の寶物保管係の職に在る人なり・井出氏にも画伯の熱誠相通じたりけむ・快諾の上翌日を期して・内覽手續きを履行し置くべき旨を約されたり・是より先画伯は・事の顛末を詳述して・在京の加太邦憲氏（3）に援助方を乞い置きしに・恰と好し加太氏より・百萬遍住職に宛たる依頼状をも接手したるを以て・茲に両々相埃ちて・其内覽許諾を得たれば・夫れより又四五日間を費し・全く内見模寫を完了したり

東京出發以來茲に五ヶ月の日時を經過中・画伯は妙法院・知恩院・百萬遍等の寺院に寄寓し・其間禪学を修養し・或は寺僧と共に座禪に參し・或いは托鉢僧に交じりて・京都市中を托鉢行脚し・以て滞在の資を助け・又は伏見奈良等に至りて・舊跡を訪ひ・法隆寺・唐招提寺・東大寺・二月堂等の佛像及び佛画に關し・研鑽を積みつつ・大に画法の妙諦を獲得したり・画伯が其後日本画揮毫の上に表はるる・禪味又は古雅の趣味は・京都及び奈良滞在中に・修得せりと思はる・画伯をして若し此上に・數年の研鑽を此地方に費さしめしならば・佛画に於ける一層の妙諦を握りて・天晴れの佛画家とならしめしならむ・然るに画伯が恩師瀧翁に對する・温情よりして・一日も速に歸京の上・師が待ち戀がれ給ふ・顔輝及び張思恭の古画模寫を・一覽に供せむと思ふ・念慮切なりしかば・茲に滞在中温情を以

て・對せられたる妙法院村田師を始め・西本願寺・知恩院・二尊院・百萬遍等を回訪して・厚く謝意を述べ・愈々京都を離るる事とせり  
 帰京の上早速瀧翁に面接・京都滞在中の苦辛談を・詳かに語りつつ・模寫の古画を清覽に供せし時は・瀧翁雀躍して嬉し涙に咽べれたり・其翌日は先づ千家男爵・松平伯爵邸に参り謝辞を呈し・其他加太郎憲氏・及び宮内庁の當局にも・一應の挨拶と謝意とを表したり

画伯は斯の如く・幼年時代より苦学を積み・研鑽を怠らず・身を持つること極めて質素・決して邊幅を飾らず・破れ袴を穿ち・木綿羽織の色の褪せたるをも苦とせず・駒下駄の鼻緒は・荒縄もて繋ぎ合せ・帽子を被らず・鬢髪長く伸びて・鬚髯亦剃らず・一見乞食とも見紛ふ程なるを介意せず・其上京都滞在中・座禪又は托鉢の趣味を味ひしよりは・一層其度を増したるの感あり・俚俗に旅の耻はかき捨てと申すも・餘りに甚しきを覺ゆ・予等の昔譚に聴き・又は演劇脚本等に見る・名匠左手甚五郎或は柿右衛門等の・風貌に酷似したるを感ず・昔の名匠等は悉く飲酒を好みしが・画伯の如きも・斗酒を辞せず・遂に酒毒の爲めに・鼻端赭黒色に変じ・實に滑稽なる風貌を供へられたり

然るに斯く邊幅を修めずして・恬然たる點に名匠の面持の籠もれるものあるは・いと尊敬の價值あり・彼の世間の画工美術家が・動もすれ幫間式の体度にて・貴紳富豪に媚び・猫撫聲して世間を胡麻化し・渡世をなすに比ぶれば・實に宵壤の差ありといふべし・画伯の

如きは・真の名匠・真の美術家たるの典型を備へ・現下の幫間式美術家の模範となるべき・資格を有する人なり

明治二十八年男爵岩崎彌之助氏より・瀧和亭翁に依頼して・屏風一雙の揮毫を乞われし際は・画伯は十數日に涉り・師翁に供して岩崎邸に通ひ・大作に一代の心血を・注ぎつつ完成せられたりしが・其後男爵渋澤栄一氏も・此屏風を一覽して・慾望禁せず・瀧翁に懇請ありたり・然るに翁は齡既に老境に入り・這般の運筆には堪え兼ねるを以て・内弟子の石橋和訓を助手とし・此者の手傳を黙認せらるるならば・引受けて苦しからずと答へられしに・渋澤家に於いて之を諒とし・是より數日間王子町の・渋澤家に師翁と共に通ひつつ・絶代の大作を完成せんとしつつある間に・画伯は徴兵検査に合格して・在廣島第五師團野戦砲兵第五聯隊第二中隊に・入營勤務することと決したり

岩崎及び渋澤両家の・和亭翁の屏風といへば・翁一代の熱血を注がれたる・傑作にして・或時明治大正時代の・傑作展覽會に出陳せられし程の名作なり・現下數十萬円の價格を唱へられ居ると聞く

是より先明治三十年四月・松平伯爵家の令妹・三井家に婚嫁せらるるに當り・持參の諸道具中屏風一雙に揮毫を・依頼せられて・之を完成したるが・画伯揮毫日本画中の傑作の一なり

画伯は愈々入營と決せしが・折角和亭翁内弟子中にも・一段と傑出

したる画伯を・三年間兵營生活に送らしむることは・實に技術研究を中斷するものとして・各方面より惜まれつつ・徴兵忌避の陋策を講せしめんと・画伯に窃に注意を與へし・人々もありしが・當時朝鮮國公使たりし・大島圭介氏は之に反對して・強硬に画伯の入營を奨慫せられたり・然れども在營中・画伯が身体に萬一の過ちあらむことを虞れ・時の第五師團長山口素臣氏は・大島氏昵近の間柄なるを以て・之に添書して・特に注意を與へられむことを依頼せられたり

明治三十年十一月中旬・画伯は東京を後にして・一旦郷里島根縣飯石郡に帰省し舊識の人々に面會し・且両親始め祖父兄弟にも久闊を叙し・一別後の経過をも打語らひつつ・二三日を郷里に起臥したる上・十二月一日廣島師團に入營したり・然るに山口師團長は・特に書画骨董の趣味に愛着の人にして・画伯を愛撫せらるること甚しく・他の一般兵員とは・特殊の待遇を與へられたれば・画伯は在營中も・始終研究の時間を附與せられたり

斯くて在營中は日々練兵の訓育に時間を費し・夜間は自己の所志に向て励精是れ勉むる間に・嚴島神社の寶物中にも・彼の京都知恩院に在るものと・同圖圖柄の顔輝作蝦蟇及び鉄捌仙人の画幅あることを探知し・之を一覽せんと思ふ念に燃えければ・其時期の到来を待ちけるに・同聯隊中に島根縣出身の・秋上下士官といふが勤務したり・其下士官とは同郷の間柄とて・懇親を結びつつありしが・或日曜日の休暇を利用し・秋上と共に嚴島神社参拝を計画したり

折しも秋山下士官は・郷里より多額の仕送りを受けて・懷中豊富なりしかば・數名の取巻をも召具し・船を賃して宮島に渡り・恭しく神社に奉養の後・料亭に立寄りて酒肴を命じたり・同席へは嚴島神社の神官數名をも招じて饗應したるが・恰も好し其神官中に・神社にて寶物を主管する一員あるを発見したれば・其神官に取り纏りて・蝦蟇・鉄捌両仙人の画幅内見を依頼せしに・之を快諾して神社寶物館に案内せられたり・茲に画伯は知恩院の原本と・百萬遍の模本と・嚴島神社の模本とをも・併せて内見して終り・大に画道に貢献する所ありて・画伯の手腕力量日一日と加はり行くを覚えしむ

是偏に斯道に向つて研鑽を怠らず・且其研究の慾望を充たすに嗇ならざりし・熱烈の努力の結晶とも云ふべし・斯くして画伯は・既に日本画に於ける蘊奥を極め・南画に於ける精髓をも極めたりと思はるるに・尚進んで研究の志望を緩めず・到る所の古社寺及舊家等に就いて・古書画骨董の詮索を怠らざりしは・實に奇特の心懸にして・且晩年大成の器を具へし人なり

明治三十二年廣島第五聯隊は・優秀兵二名を撰抜して・東京砲兵工科学校に入校せしめしが、其二名は画伯及び柳樂千之助なりき・茲に於て画伯は久々にて東京に帰り・恩師を始め松平伯千家男邸其他を訪問して・廣島在營中の物語をも為し・工科学校の課業をも怠らざる内・在校一ヶ年にして・再び廣島第五師團に帰營したり

斯くしつつ・第五師團在營の期間・殆んど満ちなむとせし折しも・

明治三十三年北清事変突発して・各師團より出征兵を撰抜渡清せしめらる・画伯も訓練古参兵として・渡清を命ぜられ・支那各地に轉戦し・砲彈雨注の間を・馳驅して國家の為に努力したり・或時は画伯騎乗の馬は砲彈に命中して殞れしも・画伯は微傷だも受けずして・間もなく帰朝したり・其後尚北清事変に関する残務整理・及び人馬引上事務等のために・山縣少佐山岡大尉其他と數次渡清しつつある間に・在京の恩師瀧和亭翁は・病の為に逝去せられたるは・画伯の為に終生の痛恨事たりしなり

明治三十四年十一月解隊せられ・廣島より直ちに東京に歸りたる画伯は・既に恩師に先立たれ・斯道研究上に一頓挫を來たしたるを感じ・心淋しく起臥する内に・熟ら熟ら画界の趨勢に着眼すれば・行く行くは漢画南画のみよりも・和洋折衷の画風が・世の大衆より歓迎せらるること多きを察し・飄然英米に渡航して・歐風の画趣味を南画に加味せむと思ひ立たれたり

然るに私費にて歐米渡航は・到底貧書生たる画伯には・企及し難き一事なりしなり・折しも青年画会の大家たる下村観山氏は・運動振肯綮に中りたるものか・官費留学生として・歐米に留学の事に決せしと聞き・始終画界に於て競争し來りし画伯は・觀山氏に機先を制せられしを遺憾とし・奮然として私費渡航の目的を達成せむと・日夜焦噪したりしが・英京に至るの旅費は・優に數千円に上ると聞き・殆んど絶望落膽に近きを感じしめたり

干時陸軍に於て・軍隊生活を為せし者の中より・要塞の探訪員を募

集するを聞き・之に應募して採用せられ・遍ねく各要塞地帯を・遍歴し其庠手間に於て・各地に埋れたる古書書類を探索し・之を轉賣して利益を見・以て洋航費に充てむと決意したり・夫よりして或は奥羽青森・或は九州長崎・佐世保・呉・舞鶴等所に於て・此方針の下に奔走し・農家商家を嫌はず・道具商骨董店を厭はず・手當次第漁り盡くする内に・思ひも寄らざる貧弱の道具屋に於て・雪村の屏風一雙を掘り出したるは・實に画伯天與の幸福にして・是ぞ洋渡航費の基礎を作したる・屈強の財源を築き上げたり

然れども此貴重品を轉賣する上に・又々一苦勞を感じしめたり・之を時價にて營業者に渡せむとて・其間には只僅少の利益を得るのみに止まるべし・宜しく之を世の義侠ある資産家に持込みたる上・自己の所志を酌量し呉るる人を得ざれば・其目的は達し難しと窃に決意し・彼か是かと持込先を熟考しつつある一日・明治三十六年十二月初旬・神田猿樂町の兎ある牛肉店に於て・一酌を催しつつある内・傍らにて召使女中等の・喃喃々世間話をなす端に・裏猿樂町の三輪信次郎(4)といふ素封家は・憐憫の心深く・家に召使はるる女中等に對しても・何角と親愛の意を注がれ・且信佛家にして・毎朝拂曉時より佛壇の前に正座し・誦經座禪の上にあざれば・接客をもなさず・勤勉慈善の篤志家なりと・褒めそやすを耳にしたれば・尚夫等女中に就きて・面會を求むる方法を聞かし置き・翌早朝麻其邸宅を訪問し・●勤誦經の終るを待ちて・面會を願ひ出でたり

初對面の三和(ママ)信次郎翁は・近隣にての風評の如く・徳望あり



且慈愛心に富みたる人にして・画伯の熱烈面に溢るる哀情を・酌量して義侠的に・幸村屏風を三千円の巨額にて・購はんことを約せられたり・画伯此時の意氣實に中天に昇りたるが如く・翁の義侠心憐憫に向つて感謝を禁ぜざりしといふ

恰も伯爵小笠原長幹氏(5)及び伯爵上杉憲章氏(6)は・遊学の爲め英京倫敦に渡航せらるるに會し・両伯に懇請して其随行員の列外になりと・差加へられむことを求めしに・快諾を得て中條精一郎(7)・同井上匡四郎(8)・三土忠造三氏(9)と共に・其随行員に差加へられたり

則ち明治三六年十二月下旬・画伯の素志は達せられ・勇ましく横濱を解纜して・英京倫敦に向ひたり・是ぞ画伯が數年の後・世界的肖像画の大家として・英名を英・佛・米・伊の各國に走せたる動機となりしものなり・上陸後彼地の粹を集めたる・美術館又は博物館等に就きて・洋画の趣味を深く検討するに・日本に於て持て囃さるるが如き・初穉のものに非らずして・極めて深遠の情趣を含むもの多く・之を研究會得するには・多大の費用と日子とを積まざるべからざるを感じしめられたり

画伯が洋航前よりの競争者・則ち画敵として目せし・下村觀山氏は・意氣揚々官費留学生として・既に倫敦に在りて・泰西の美術研究に没頭中なりしに・一驚を喫し・其先鞭を崩折せむ爲めには・奮闘努力を惜まざるべしと覺悟したり

其頃倫敦總領事館には・總領事として島根縣飯石郡吉田村出身の・坂田重次郎氏(10)在勤せられたり・同郷の縁故を以て・屢々公館を訪問し・腹藏なく所志を具陳せしに・坂田氏大に同情せられ・其頃滞英中の子爵末松謙澄氏(11)に・画伯を紹介旋方を依頼せられたり・子爵は大に画伯に同情して・同國の画大家ジェー・サーゼント氏(12)及びジェー・ソロモン氏(13)等に紹介せられたり・画伯はサーゼント氏より初めて洋画の・手編きを受けしに・當初は日本画程には難事に非らずと思はしめたり・然りに其●叢に立入るに従つて・宏遠無比到底形容すべからざる・至難に遭遇するを覚えしめたり

斯くは果てじと遂に意を決し・明治三十七年四月に至り・ケンニングトン・ペインテングスクールといふ学校に入学して・油画に関する研究を始めたり・其年の十二月に至り遂にダーレー・ギャラリーの會員に推擧せられ・茲に始めて英國に於ける・画家組合の一員たることを得たり

サーゼント及びソロモン両画伯は・画伯の手腕凡庸に非らざるを看破し・恰も同年の十二月より開始の筈なる・ローヤル・アカデミー則ち王立美術学校の・入学豫備試験に應ぜむことを・熱心に奨慫せられたり・画伯は依て之を末松子爵・坂田總領事其他中條・友枝氏等の諸先輩に協議せしに皆悉く賛賛裏せられたるに依り・茲に受験の上通学を始めたり

ローヤル・アカデミーは・倫敦より・五哩の距離に在り・日々電車賃の多額を要するを以て・所持の資金空亡を感じ来りし矢先とて・五哩の間を日々徒歩にて通学するの・止むなきに至れり・然りに斯る際といへども・画伯が一日も忘れ得ざる・飲酒代のみは・他を節約しても・窃に之を貯へ置きたり・然るに何時しか此酒代すら・残餘稀少となり・一日に麦酒一本づつの・豫算を餘ますのみの・窮境に陥りたり

干時倫敦に於ける・日本正金銀行支店長に・異孝之丞氏あり・相當義侠心に富めりと聞きしに依り・同氏に合力を乞はむと思ひ立ち・一日同氏宿舎を訪問したり・恰も其日の倫敦タイムス記事中に・日本より来れる素寒貧の一書生が・大膽にもローヤル・アカデミーの豫科入学の試験に應じて及第せりとの報道ありしこととて・異氏も大いに興味を感じ居られ・快く引見したる上・即座に五百金を惠與せられたるは・画伯の終生忘れ得ざる・救世主ともいふべきか・画伯は異氏の此義氣に励まされ・愈々益々奮励努力して・以て洪恩に報い・日本國民の聲價を博せむものと誓ひたり

然るに画伯に取て・今一つの難関となりしは・英語に未熟にして・動もすれば受験の際・落伍せんとする虞あるしこと是なり・依て今の帝大教授文学博士友枝高彦氏<sup>(14)</sup>に縋り・通釋の勞を取らんこと願ひしに・是亦快く承諾を得・遂に百四十何人といふ受験者中・四十六人の及第生の中に入ることを得たり・此時の辛酸は實に筆紙にも尽し難しと・其後画伯の屢々語る所なりし

同校の豫科に在ること一ヶ年・明治三十九年二月四十六人の受験者中・三十六人の中に加はりて・ローヤル・アカデミーの本科に進級せり・同年七月ローヤル・オータカラ・ソサイターの試験に入り同年九月にはローヤル・オータカラ・ソサイター則ち王立水彩画會員として・出品館に出陳したる結果・明治四十年二月同會々員として加名せり

明治四十一年二月ローヤル・アカデミー本科を・好成績にて卒業せり・要するに豫科入学應試者百四十餘人の内・豫科入学者四十六人なりしが・豫科修了して本科に進級せし人三十六人となり・今又本科卒業の際には・僅に九人に減少・茲に日本人として・偉大の光榮を荷ひしことなれば・時の倫敦タイムス其他の紙上に於て・高名を走せたりといふ

然るに画伯が同校在学中の・努力辛酸は實に名状すべからざるものあり・晝間は学校に在りて・一心不乱に筆を採り・夜間は日々の食費則ち下宿料を得ることに・必死の努力を拂ひ・或は他の需めに應じて・油画及び水彩画等を揮毫し・或は他の画家に備はれて・揮毫の手傳をもなしつつ・一意専念同校無事卒業をのみ・心懸けつつ猛然として進みしなり

画伯は此榮冠を荷ひしにも●らず・尚進んで其緼奥を窮めんものとな念せしと・如何せむ学資續かず・折角の熱意も半ばにして挫折せむとする・窮境に陥りたり・然るに世には捨つる神もあれば・又助く

る神も座しまして・茲に其當事在英中の・文学博士高楠順次郎氏の・義侠的援助を得て・画伯が目的を貫徹するの・端緒を握ることを得たるは・實に幸運といふべし

明治四十一年二月・高楠氏の学資援助に依り・ローヤルアカデミーの研究科に進み・刻苦努力を積みつつ・二ケ年間勉学の上・明治四十三年一月卒業証書を掌握したり・茲に至りて本科卒業生九人の内・只僅に三人踏み止まりて榮冠を勝ち得たり・然かのみならず・同校は特に画伯に金牌を授與し・且スコラー・シツプの名譽を荷はしめたり

此スコラーシツプの名譽証は・英佛伊其他の美術家中にも・容易に之を握る人なきに・東洋日本出身の・一貧書生にして・之を掌握したるは・實に偉大なりとて・英京の内外を裏かしたる程の・高評となりたり

此高評四隣に傳はりしより・英佛其他の貴紳は・画伯の夫人として・其令嬢を婚嫁せしめんと・八方より其申込を受け・画伯は一時其取捨に苦しめられたり・然るに画伯も齡茲に三十四歳・東洋人として未曾有の榮譽を得・功成り名遂げたる境涯なれば・茲に媒酌を得て・佛國に於ける貴紳の令嬢と結婚し・翌年男児を擧げて・円満なる家庭を作り上げたり

明治四十三年六月・時の駐英代理大使山座圓次郎氏夫妻の肖像を・

高さ八尺幅五尺の画面に収めて・之をローヤル・アカデミー展覽會に出陳し・見事入選の榮冠を荷ひたり・其後年々の同校展覽會に・画伯の作品を見ざることもなく・同展覽會出陳者中の花形と・稱揚せられ・曩に掌握したるローヤル・アカデミー研究科卒業証書と共に・東洋人としては未曾有の榮譽たり

其後画伯はローヤル・ソサイティー・オブ・ポーツレイトペンシター則ち皇立肖像画會及びローヤル・インスチテュート・ペインターズ・オブ・オイルス則ち皇立油繪協會のメンバーとして推薦せられたり

画伯は茲に至る十數年間・克苦励精の効空しからずして・今は世界的大家の榮名を走せ・英内地は素より・佛國伊國瀟逸等にも・ミスター・インバシの名を誦はれ・隨て揮毫依頼者も簇出し・家庭的にも恵まるる所ありて・漸く画家としての門戸を・倫敦に於て構ふに至れるは・實に勤勉の餘榮と云ふべし

斯くて二・三年間は・尚所志の目的に向て・奮闘を續け・或は倫敦社交場裡にも馳驅し・或いは巴里の油繪画會にも出席し・専ら手腕を磨くことに勉めたり

明治四十五年二月・倫敦大使館付武官東砲兵大佐の・肖像を画きて・之を佛國巴里サロンの美術展覽會に出品せしに・是亦美事入選の榮譽を荷へり・其後巴里サロンにも・年々同画伯の出品を歓迎して・陳列するを例とせらるるに至れり



其頃倫科大学校長に・サー・ヒル氏(15)在勤せられしが、画伯の画才に深く敬意を表せられたり・其後同大学の食堂新築せらるるや・画伯に依頼して・食堂の壁画を画かしむ・其額面は高さ九尺長さ一五十尺にして・筆を正月の場面に起し・春の花鳥・夏の納涼・秋の紅葉・冬の雪原に至る四季の風光を・日本風俗に寫したるものにして・極めて心膽を打込み・精髓を注ぎたる大作にして・恐らく画伯一生の心血を絞りしものなりといふべき

大正五年(西曆一千九百一十一年)巴里サロンは・画伯に對して・名譽賞状を授與したり

恁くて画伯は倫敦を出発し・希臘・羅馬其他南歐の各地を巡歴・中古以来の名迹を探訪し・古美術の●叢とも称すべき地点は・剩す所なく之を究めて・遂にB・S・R・P・又はK・O・I等の肩書を帶するに至れり・而して・画伯の作品は大英国博物館・テート・ギャラリー・サウスケンジントン・ミュージアム其他リヴァプール・アバゾン・グラスゴー各市の美術館・又は北米ボストン市・濠洲シドニー市美術館にも・収集陳列して・●客館の誇りとなすに至り・画伯の名聲は歐米を始め・遠く南米及び濠洲にまでも亶き渡り・今は當初の希望の如く・實に世界的大画家赤鼻のミスター・イシバシの名は・僻遠の地までも響き渡れり

然るに茲に独逸の専横を防壓せむと・英佛伊西瑞各國は擧つて軍を起し・歐洲全土は修羅場と化し・美術工藝に目を觸るる人なきに至りしかば・画伯は此機を利用して・久々にて日本に帰朝せむと決心せり・干時大正七年一月画伯渡英後●き數ふれば・既に十五ヶ年を

経過し・郷里島根縣に於ても・親戚故舊の情態一変して・山のたたずまひ川の流のみ舊態を残すのみと聞く・懐かしき里に錦衣を飾らばやと・望郷の念切なるものありしかば、断然意を決して・倫敦を後に印度洋上を航走し・二月一日横濱に上陸す・

横濱に着船すれば・出迎の貴紳には・在英中駐●官たりし・外務省の人々を始め・財界にては三井・三菱・正金各銀行の重役各位其他数多人々を數ふる中に・一と際目立ちて見えしは・画敵下村觀山氏の姿なり、氏は在英數年にして・明治三十八年帰朝後・帝室技藝員の榮位を擔ひ・我が日本画壇の重鎮として・押しも押されもせざる地位に在り・一介の石橋画伯の帰朝を・然かも横濱埠頭まで態々出迎へられたるは・實に感謝に堪えずと・画伯は何時までも之を記憶して忘れざりしといふ・夫より數日後是等好意を表する人々の発起にて・芝紅葉館に一大歡迎會を催され・朝野の貴紳百數十名出席・盛宴を開きて画伯を招ぜられたり

夫れより二・三年間日本画壇に在り・アトリエを青山に設けて・或は洪澤榮一男の肖像・土方伯爵・若槻男爵・東郷元帥・徳川公爵等の大肖像画を完成し・文部省第一回美術展覽會開催に當り・画題(思出)を出品して・三等賞を得たり・同第三回展覽會には・画題(美人謁詩)にて同じく三等賞を授けられたり

大正七年文展第十二回に・画題(某氏の家族)を出品して・特別名譽功勞賞を授與せられ・推薦員として指定を受け・同年の美術展覽

會には・會員として推擧を受け・且數回審査員を命ぜられ・我が洋面壇上を●翔して・高評嘖々たるものありき

青山アトリエに於ける画伯の居常は・其頭脳何時も研究心を離れず・或時は庭隅より蟊蛙を捕へ来りて・之をアトリエの四隅を飛び廻らしめ・各趣態に之を描出して・油繪に画き上げ・又は魚店より鯉魚を求め来り・生死の両場合に依りて・鱗の色の変ずるを描出し・或は又鶏を鳥屋より持参せしめて・其微細の羽翼を一々描き分け・或は林檎・或はバナナ・又は四季の草花等・悉く其色彩を鮮明に描出することに向て・少しも其研鑽の手を緩めざりき

画伯は少年時代より・四隣に亶きたる酒豪にして・然かも取り分け・日本酒を最も好み・英京に在る間の十五ヶ年は・此點に不自由を感じたるに依り・帰朝後日本酒の自由を解放せられ・朝まだきよりのを飲み煽りし為め・時々身体に違和を感じたるを以て・周囲よりの忠告をも容れ・断然として禁酒を誓ひたり

大正九年三月再び日本を後に渡英することに決したり・然るに印度洋上に於ける船室にても・日本人の同航者中に・画伯の如き飲酒家が・遽かに禁酒したるを訝かりつつ・航海中の一大話柄となりたることあり・着英後も禁酒の爲め・画伯の行動兎角に不活潑となり居たるが・大正十一年佛國サロンの出品画に・画伯は其妻子をモデルとして手腕を振ひしが・果せる哉何時もの如くに・其出来榮え面白からず・何となく画面にも銷沈の状を・有り有りと示せしかば・倫

敦に於ける画友よりも・注意を受けたることさへありたり

依て画伯は二ヶ年餘に涉りて禁止したる飲酒を・茲に解禁して再び元の如く・酒杯を手にするに及び・數日後にサロン出陳の画面を大成したり・其出来榮えを見るに・活氣画面に湧躍して・氣息通へる其人に接するが如くなりしといふ・昔左手甚五郎の如く・彼に酒を與へざれば・數ヶ月又は半年に渡りても・斧鉞を執ることを欲せざりしが如し・矢張美術の天才家には・各其嗜好する物を提供し遣らざれば・頓に其手腕に緩みを覚ゆると同じ・又画伯は邊幅を飾らざると同時に・決して居常尊大振る擧動なく・且画筆を揮ふに當りても・絹・統・唐紙・画箋紙の何たるを撰はず・油繪を描くにも・其所等に破り捨てられたる小包用のパラピン紙・果ては大工等が鋸切り捨てたる板切をも辞せずして・忽ち刷毛を握りて之に描く等・一般書画大家の如き尊大振りを示さざる所に・大に賞揚すべき價値を認められたり

画伯が妻子の画像を出陳したる・佛国巴里サロンは直に審査して・名譽賞状を與へ・画伯をサロンの正會員に推擧したり・是より先大正十年には日本伯爵亀井茲常氏の一家庭の大幅を・同サロンに出品して・準會員推薦の榮名を擔ひ・今又陞せて正會員となせしは・東洋人としては夢にも企及せざる榮位といふべし

亞いで又英國ロイヤル・アカデミー展覽會・佛國サロンの美術展覽會に於ても・推擧せられて出品を續けたり・斯くして大正十二年に

は・再び英國を出発して帰朝し・今回は渋谷常磐松にアトリエを新築し・引續き顕官達の肖像揮毫を励精したり

大正十三年青山明治神宮外苑に新築中の壁画館は・其工殆んど成らんとするを以て・日本に於ける和洋画家を・撰抜して壁画揮毫を命ぜらるる・則ち画伯も其選に入り・明治大帝が明治の初期・宮中に於て米國より来朝せし・グラント將軍と握手御對話中の・一場面を描出して・之を献納すべしとの命を拜受したり

又・今上陛下東宮にて座しまして・御成婚の際奉祝の爲め・ブラジャー海峡の實寫を描出して献納し・御嘉納の光榮を擔ひたり

今回の帰朝後は・画伯が油繪の手腕・愈々益々練熟して・各方面よりの依頼引きも切らず・一々其依頼を應諾し得難きまで・高評を博したり・則ち最早肖像画に於ては日本第一人者として・誰しも首肯するに至れり

予は画伯が最初笈を員ふて・着京し千家男爵邸に在りて・暫らく共に起臥し・画伯が瀧和亭翁の門に出入を為すに至りたる際・其萬事を斡旋したる厚意を深く記念し・予が画伯のアトリエを訪問する毎に・予を以て目的達成の恩人なりと目し・何時も画伯より・非常の優遇を受け居たり

干時大正十四年の或日・予が画伯を訪ひし折・画伯は再び徳川家達

公の肖像執筆中なりしが・其日の作業を了へて後・未だ精力に餘裕あれば・恩人たる河邊先生の肖像にも着手すべし・其儘の姿にても宜しければ・此椅子に倚りて二十分許り静座あり度しと・提言の儘に椅子に倚りしが・其後三回連續して・二三分づつ・訪問の後は・極めて美事なる・予の肖像油繪の完成を見たり・其大さ幅二尺五寸・丈け三尺に近き大作にして・予は画伯の好意を感謝し・急ぎ額縁に収めて・之を家寶として今に珍重保存せり・画伯が些少の恩誼をも忘れず・優遇款待の上・斯る勞作をも辞せざる友情は・洵に掬すべきものありといふべし

又画伯が書く日本画も・既に和亭翁の門に在る間にも・青年画家の大家・和亭翁秘藏弟子の一人と推されたりしが・二十ヶ年に近き在英研究の結果・一層筆力の雄●を招き・運筆非常に活氣を添へ・花鳥を描くにも・山水の風致にも・何所となく豪放の氣漂ひ溢れ・画法の細羈に拘泥せず・極めて豪放に運筆せられたるを以て・其當時の小心翼翼たる日本画家は・画伯の作品を批評して・西洋画にもあらず・南画にもあらず・一種異様の混同画なりとまで悪評を放ち居たるに・豈計らんや其後の画壇は・皆此輩に倣ひ・運筆奔放恰も脱兎の如く・圖構極めて伸々たる作の多きを見るは・画伯其先見の明ありて・画壇を茲に導きし先覚者とも云ふべきか

画伯最初瀧翁の塾に在りし時より・之を先見して豫期したるが如く・日本画壇といへども・叙々に洋画の趣味を加味し行くべく・単に舊來の如き几帳面式の・漢・南画の型を墨守するのみにては・充分其発達を觀ること難かるべし・宜しく其圖構を豪宕にし・其運筆を奔

放にして・鎖々たる末節に拘泥すべからずと主張し・之を達成せんとならば・彼の油画又は水彩画の妙●を・加味して程好く之を融和せしむるを要すと・専ら之を唱へたり・画伯此目的に向て進まんが為に・渡歐の念切なりしが・遂に念願を遂行し・苦辛慘擔の結晶として・彼の地英國にては・王室技藝員の列に加へられ・佛國にてはサロン正會員の榮位を荷ひ・其他米國及び濠洲にまでも・其画風を裏ろかしたるは・東洋人としての第一人者・寧ろ世界的大肖像画家として・指を屈するに至りしは・洵に推奨すべき画伯の榮譽のみならず・我が日本の誇りと稱すべき價值ある人なり

古諺に艱難汝を玉にすといふ言あり・又玉磨かざれば光なしといふ言もあり・孰れも之を画伯の経歴・榮達の跡に比べ見て・洵に其偽らざるを感じずんばあらず・画伯生れながらにして・如何に天成の明珠・則ち琥珀・瑠璃・水晶・瑪瑙の如きものを・身に抱くとも・之を切磋琢磨して・反覆精鍊するに非されば・画伯晩年の如き・耀々たる光輝を放たざりしならむ・其貧苦の家庭に生育しながら・克く臥薪嘗膽の辛酸を●き来て・嶄然立志上京・且渡歐の大望を果し得て・終に功成り名遂げたるは・則ち艱難が克く汝を玉にしたるものなり・此の反映として古往今來・東西の別なく・富貴の家に愚鈍の子弟を多く産す・是即ち依頼心に驅られて・螢雪の苦を積まざるが為めなり・故に人は宜しく画伯の閱歴を模範とし・所謂誘惑を避け・萬難を排して所志に邁進せざるべからず

画伯が閱歴を見るに・時々此誘惑に逢へりし時代あり・彼の中等教

員の免状を得んと欲し・又郡長或は知事の豪奢振りを羨みしが如き・且瀧翁塾に在りて・各種不良墮落生の誘惑に逢ひしが如き・一再に止まらざりしに・画伯克く一時身の佚樂・口舌の嗜慾を排除し・所謂身慾の為めに心を使役されずして・是等の誘惑より逃れ・決然として所志を貫きしは・洵に稱讚すべし・古人も此の場合を嘆じて詠みし歌あり・「つくづくと思へば悲しいつまでか身に使はるる心なるらむ」と・以て克己・制慾の人生に喫緊事たるを曉るべし

又画伯は克く寸陰を惜んで・努力を續けたる人なり・彼の瀧翁の塾に在りて・同門中の不良分子が・誘惑妨害を為すにも屈せず・古桶に豆ランプを挿入れて勉強せし時の如き・常に古諺の「一寸の光陰軽んずべからず」を恪守したる人なり・世人は動もすれば嘆息して曰く・時間の乏しかりしが為に・業遂に成らざりしなりと・然るに業の成らざりしは・努力の足らざりしにて・即ては時間を利用せざりし人なり・本居宣長大人の詠歌に「折々は遊ぶ暇のある人のいとまなしとて文續まぬかな」といふがあり・世人の大●は大抵比喩を踏む人なり

又画伯は貧家に育ち・習ひは則ち性となりて・彼の獨逸の格言「服装は人を作らず」を克く体し・中年以後稍々収入を得るに至りても・決して之を改めず・何時も弊履を穿ち・短袴に身を固め・髪を梳らず・然ながら仙人の如き体裁にて・恬然として貴顕富豪の門にも出入せしなり

斯の如く油画・水彩画にて大成し・日本画壇にも新空氣を注入したる画伯は・各方面の懇請黙止し難きに依り・齡六十歳に達するまでは・貴紳の肖像を揮毫せむも・六十歳以後は之を全然廢して・日本画壇に只管精力を傾注せんと覺悟せられたり・然るに天は斯る大家に齡を貸さず・昭和三年五月三日遂に不歸の客となりしは・天下を擧げて痛惜措く能はざる所なり

画伯は斯く令名を洋の東西に走せ・功成り名遂げたるが如き觀ありしも・今暫くは天壽を與へて・責めては宮内省の内命に係る・明治神宮外苑壁画館の壁画に・画伯渾身の才筆を注がせ・末代まで画界に・其驍名を留めさせ度く・画伯自身も之を期待し・予等を始め・數多周囲の人々等も・亦一意専心希望を・繋け居たるに・一朝にして無常の嵐に・誘ひ去られたることは・返す返すも遺憾といふべし

其當時を回顧すれば・予は画伯の上京よりも數年前・既に東京に在りて・慶應義塾に通学し・何角と東京の事情にも通曉して・自惚れながら先覚者たりしを以て・画伯を彼是と指導もし・且千家男爵邸に於て・起臥を共にし之を庇護し居たる關係より・恰も實弟を得たりしが如き・温情をも感じ居たり・然かのみならず・画伯が瀧翁の門に入る時の如き・或は京都に下向の際の如き・秘寶内覽に関する・宮内省の手續きの如き・又は英國渡航の際の旅行免状・其後數回に涉りし帰朝・及び再渡航の手續き等・一々千家男爵の指揮を受けつつ・予が其紹介依頼の・萬般の手續を執りたるを・深く感銘して忘れず・画伯が予に對する温情も・亦眞の兄弟に超越したる体度を・

示されつつありたり

然るに画伯幼少時代よりして・三度の食事にも彌増したる・嗜好を訴へ来たりし・飲酒の害毒・体内に鬱積したるものか・圓らざりし一朝の発熱の爲めに・痛く心臓の衰弱を招き・発熱に抵抗する体力・全然喪失して・二三名醫の盡くしたる最善の手當も・又在らゆる方法を講じたる手厚き看護も・皆悉く水泡に歸し去りたるは・天命とや申すべからむ

若しも画伯をして・中年時代より少しく注意して・節酒又は禁酒せしめしならば・斯の如く短命には終はざりしならむ・然るに画伯曾て茲に留意し・大正九年二度目の渡英頃より・一時は断然禁酒し・一滴の酒をも喉に通はざりし事ありしが・豈計らむや其際の画伯の作品たるや・意氣銷沈の色を画面に顯はし・彩管執る手も何となく渋滞勝にして・少しも活氣なく・紙面に淋しさのみ漲りて・佛國サロンへの出品作も・到底賞讃を博し得べき望なかりしといふ・故に画伯をして・其持前の雄健なる手腕を・縦横に揮はしめんとならば・彼の欲する儘に飲酒を續けしむる必要ありしなり・是に於て彼は・サロン出品作の執筆中途よりして・又舊の如く酒杯を口に始めたるに・見變るほど画面に活氣を添へ来り・實に自らも許す程度の出来榮えなりしに依り・之を出品せしに・果せる哉好評噴々・巴里付近の新聞社は・特に画伯の作品を撮影して・讚辭と共に紙上に掲げ・名聲全歐洲を裏ろかしたりといふ



然らば此時に該り画伯をして・「快樂を適度にするは健康を●すの道なり」との・金言を恪守せしめ・爾後は絶対に禁酒せしめて・只管健康をのみ希はしめしならば・技術は段々退嬰にのみ傾きつつ・只々平凡極まるる一画家として終らしめしならむ・則ち画伯は●全を捨てて・玉碎を撰びし者とも謂ふべきか・茲にして想へば・我等如きの鈍物のみ・●全にして世に永らへ・画伯の如き珠玉にも譬ふべき人が・斯く命數を全ふせずして・早く碎け去りたるぞ・いと口惜しき極みなる

予は画伯着京當時より・親交を重ね・兄弟にも勝りたる温情を感じつつありしが・今空しく画伯の生前を追懐するのみにて・執筆に際しても感無量なり・画伯追悼の予の腰折和歌を追記して・此稿を畢らんとす

我よりも若しといひて懸けたりしたのみの綱も  
絶えし今日かな

在らま欲し永らへませと願ひつる人はあへなく  
世をばまかりぬ

有り甲比のなき我のみは残りつつ惜しき人をば  
さき立てにけり

あらましの半ばも未だ成し得ずて敢なくなりし  
きみぞくやしき

画伯の閱歴を年代別にして其梗概を左に記さん

- 一 明治九年六月六日島根縣飯石郡西須佐村に生る
- 一 明治二十三年飯石郡々立組合掛合村高等小学校卒業
- 一 明治二十四年同郡南画展覽會に出品して壹等賞状を授與せらる
- 一 明治二十四年九月長瀬雲山の門に入り南画修業
- 一 明治二十五年五月松江市師範学校画学教授後藤玉舟の門に入り南画習修
- 一 同年八月松江市方圓舎掘櫟山の門に入り洋画習修是れ洋画に入りし第一歩なり
- 一 明治二十六年十一月十八歳にして上京
- 一 初めて東京麻布千家男爵の邸に着く
- 一 明治二十七年三月東京牛込新小川町本多錦吉郎の門に入り洋画研究
- 一 明治二十七年十一月千家男爵の紹介を得て瀧和亭の門に入り南画習修
- 一 明治二十九年東京美術協會漢画展覽會に出品して二等賞状を授與せらる
- 一 明治二十九年八月知恩院・二尊院の秘寶内覽の為め京都に下向
- 一 明治二十九年京都滞在中今尾景年に就き習修
- 一 明治二十九年十二月帰京
- 一 明治三十年十二月廣島第五師團野戰砲兵第五聯隊に入營
- 一 明治三十二年選ばれて東京砲兵科学学校生徒として入学
- 一 明治三十三年北清事變に付渡清従軍
- 一 同年勲七等に叙せらる
- 一 明治三十四年恩師瀧和亭翁に死別す

- 一 明治三十四年十一月解隊に付帰京
- 一 明治三十六年十二月英國に向ひ発航
- 一 明治三十七年三月ケンニントン・ペーンテング・スクールに入学
- 一 明治三十七年ダーレー・ギヤラリーの會員に列す
- 一 明治三十九年ローヤル・アカデミー入学
- 一 明治四十年二月ローヤル・オータカラ・ソサイターの會員に擧げらる
- 一 明治四十年十二月ローヤル・アカデミー卒業
- 一 明治四十一年ローヤル・アカデミー研究院入学
- 一 明治四十三年ローヤル美術大学院卒業
- 一 同年三月ローヤル・アカデミー展覽會に出品して入選の榮を荷ふ
- 一 明治四十三年五月日英博覽會委員拜命
- 一 同年伏見宮殿下英國御渡航の爲め御用室裝飾係を命ぜらる
- 一 同年日英博覽會に出品銅牌受領
- 一 同年伏見宮殿下英國御留学に付御用室裝飾係を命ぜらる
- 一 明治四十三年十月文部省展覽會へ画題「思出」を出品して三等賞と受領
- 一 同年英國皇立肖像画會會員に列す
- 一 同年英國皇立油画協會會員に推擧せらる
- 一 明治四十四年文部省第三回美術展覽會に「美人謁詩」を出品して三等賞を受領
- 一 明治四十五年二月倫敦大使館附武官東砲兵大佐の肖像を佛國サロンの展覽會に出品入選したり
- 一 同年倫敦醫科大學食堂の壁画高さ九尺長さ百五十尺の大作を揮毫
- 一 大正五年佛國サロンに作品を出品し名譽賞状を得
- 一 大正七年二月渡英後始めて帰朝
- 一 同年十月第十二回文部省美術展覽會に出品して同會より推薦員に擧げらる
- 一 同年文部省より美術功勞賞を授與せらる
- 一 大正八年徳川公爵・土方公爵・洪澤子爵・若槻男爵其他財界著名の肖像を完成す
- 一 大正九年三月再び渡英
- 一 大正十年亀井伯爵一家の肖像を佛國サロン展覽會に出品して名譽賞状を受領
- 一 同年佛國サロン展覽會準會員に推擧せらる
- 一 大正十一年佛國サロン展覽會に出品
- 一 佛國サロン正會員として推薦せらる
- 一 同年英國ローヤル・アカデミー及び佛國サロンの美術審査員に推擧せらる
- 一 大正十二年九月二日第二回目として帰朝
- 一 大正十三年明治神宮壁画館の壁画として明治大帝・米國グラント將軍御引見の圖拜寫を命ぜらる
- 一 同年文部省展覽會委員拜命
- 一 同時に同審査員を命ぜらる
- 一 大正十三年 今上陛下御成婚の際ブラジル海峡の光景揮毫獻納の光榮を擔ふ
- 一 帰朝後數年に涉り在京貴紳富豪の肖像を完成
- 一 昭和三年五月三日死去

小伝(完)

## 【解説】

今回は、京都へ古画修業に行つてから、石橋和訓が亡くなる小伝の最後までを掲載した。時期にして明治二十九年から昭和三年にかけてである。話は時系列に京都での古画修業の苦労話から、徴兵、恩師滝和亭の死、兵役後の渡英、彼の地で成功して故郷に錦を飾り、そして帰国後の急逝までが記され、末尾に年譜が付されている。内容の中で、京都の修業に多くの分量が費やされているのは、著者である河邊自身がそこにかかわつていたからであろう。記された内容は、著者と石橋の関係から聞き知ったことから起こされており、憶測、あるいは思い違いなども散見され、必ずしもすべてが事実ではないが、ここからうかがえるのは、和訓が京都で古美術、なかんずく道釈画にふれていることは特筆してよいだろう。和訓にとつて、京都滞在は内地留学的な意味を持つ。南画家瀧和亭に師事したことからもわかるように、渡欧前に和訓が受けた教育は、南画の修業であり、この京都での修業もその腕に磨きをかけるものであっただろう。目的の作品を閲覧できるまで、あらゆる人脈を駆使する和訓の姿勢は、この後の留学先、イギリスにおいても発揮される。兵役に就いている最中に恩師和亭が亡くなり、前途を憂い、新たな目標としてイギリスへの留学を志すのは、いささか突飛な感じがしなくもないが、その理由について欧風の南画を描くことにより、当時斜陽化していた南画界に新風を入れようとしたあたりは、青年らしい発想といえよう。和訓は、若い頃から時流をよく見て現実的な手を打つことに長けていたが、莫大な留学資金を工面するなどに至っては、ある種幸運にも恵まれていたことがうかがえる。この時の資金の調

達方法として小伝からわかるのが、古美術品の売買をすることであったが、この手段は後に長い滞英時代に資金を作る時にも生かされている。和訓のように経済的な裏付けがない人物が留学する場合の生活の一端をのぞくことができ興味深い。

イギリスへ渡つてからの記述は、河邊自身は直接かかわつていない事柄であることから、各種展覧会へ出品した作品がそのまま会場美術館に収蔵されているかのような誤解した記述もあるが、登場人物や機関については、残された和訓の書間から交友が確認できる。記述がすべて事実でないにせよ、イギリスでの動向の一端を知ることがかりになる。

最終的な帰国からその死までの記述も和訓を賞賛することに力点がおかれ、内容に厚みがなく終わっているが、最後に付された年譜によつて日英博覧会など本文中に記されていない事柄や、ロンドン医科大学の食堂壁画などについて記されているため、この小伝をこれまで基本資料として扱うことができた。

前回同様一部の旧字を除いて、できる限り原文のまま載せ、登場人物等については必要に応じて末尾に註釈を加えた。註釈については先行研究者である林みちこ氏の論文を参考にさせていただいた。記して感謝申し上げます。

人物等注記

1 「蝦蟇(がま)・鉄拐(てつかい)図」京都の知恩院所蔵(京都国立博物館寄託)の重要文化財で、顔輝の代表作  
顔輝 がんき 生没年不詳

字は秋月(へしゅうげつ)。宋末元初の十三世紀後半に活躍した。道釈人物画に卓越している。

2 張思恭 生没年不詳

南宋時代の寧波あたりで阿弥陀画像を専門に手がけていた可能性をもつ仏画師。近代以降は、伝説の画家とされ、また高麗仏画の作り手と考えられた時期もある。

3 加太邦憲 かぶとくにのり 嘉永二年(1849)～昭和四年(1929)  
現在の三重県桑名市に生まれる。明治時代の司法官。大学南校、司法省明法寮などでまなび、司法権少書記官などを歴任。明治十九年フランス、ドイツに留学。帰国後、京都、東京の地方裁判所長を経て大阪控訴院長となる。四十三年貴族院議員。和訓が京都にいた明治二十九年は東京地方裁判所長をしていた。

4 三輪信次郎 みわしんじろう

安政元年(1854)～昭和十八年(1943)  
現在の石川県に生まれる。衆議院議員・第十五銀行重役。和訓が出会ったとする明治三十六年(1903)第八期衆議院議員に当選。以後五

回当選。大正三年に政界を引退。その後琴曲の研究を行い山田流等曲研究会長などもつとめた。

5 小笠原長幹 おがさわらながよし  
明治十八年(1885)～昭和十年(1935)

小倉藩主小笠原忠忱の子。伯爵。英国ケンブリッジ大学に留学。帰国後貴族院議員などをつとめる。また礼儀作法「小笠原流礼法」を世に広めた。

6 上杉憲章 うえすぎのりあき

明治九年(1876)年～昭和二十八年(1935)  
米沢上杉家十五代当主。伯爵

7 中條精一郎 ちゅうじょうせいいちろう

明治元年(1868)～昭和十一年(1936)  
山形県に生まれる。大正・昭和期の建築家。上杉憲章の世子補佐の任を帯びて渡英。英国ケンブリッジ大学へ留学。帰国後は曾禰・中條建築事務所を創立。建築会館取締役、国民美術協会会頭、日本建築士会理事を歴任。作家の宮本百合子は娘。

8 井上匡四郎 いのうえただしろう

明治九年(1876)～昭和三十四年(1959)  
熊本県に生まれる。明治から昭和にかけての鉱山学者、政治家、子爵。大正十五年(1926)第一次若槻内閣の鉄道相となり、のち技術院

総裁。貴族院議員。

9 三土忠造 みつちちゅうぞう

明治四年(1871)〜昭和二十三年(1948)

香川県に生まれる。政治家。明治四十一年衆議院議員。高橋是清の補佐役として活躍。田中義一、犬飼毅、齋藤実の内閣に入閣。旧姓宮脇。

10 坂田重次郎 さかたじゅうじろう

明治元年(1868)〜大正八年(1919)年

現在の島根県奥出雲町(旧三成町)に生まれる。明治から大正にかけての外交官。在米公使館、韓国釜山領事、イギリス駐在総領事を経て外務省通商局長。大正八年(1919)スペイン特命全権公使として講話会議に加わり、講話成立後マドリッドで死去。

11 末松謙澄 すえまつのりずみ 安政五年(1825)〜大正九年(1920)

現在の福岡県に生まれる。子爵。東京日々新聞の記者をへて外交官としてロンドンへ赴任。ケンブリッジ大学で学ぶ。衆議院議員、内務大事など歴任。伊藤博文は岳父。

12 ジェー・サーゼント

ジョン・シンガー・サージエントのこと。

Jhon Singer Sargent 1856 - 1925

画家。アメリカ人医師の子としてフィレンツェに生まれる。パリで

カロリス・デュランに師事。主にパリとロンドンで活躍。上流階級を優美に描いた肖像画で知られる。和訓がロイヤル・アカデミー在学中は客員教授をしていた。

13 ジェー・ソロモン

ソロモン・ジョセフ・ソロモンのこと。

Solomon Joseph Solomon 1860 - 1927

ロンドンに生まれる。ロイヤル・アカデミー、エコール・デ・ボザール等で学ぶ。肖像画を主に描いたが、聖書や神話の主題をドラマティックに描いた作品でも知られる。

14 友枝高彦 ともえだたかひこ

明治九年(1876)〜昭和三十二年(1957)

福岡県に生まれる。大正から昭和の倫理学者。男爵末松謙澄の渡英の際秘書として随行し、イギリスの自由主義、民主主義を学ぶ。再度欧米へ留学しドイツ哲学を学ぶ。東京文理科大学などの教授をつとめた。

15 サー・ヒル

レナード・ヒル Leonard Hill (1866 - 1952)

生物学者。ロンドン医科大学教授。日本美術の愛好家で、自身も絵を描き、石橋和訓のバトロンの存在であった。和訓以外の日本人留学生の面倒もよくみている。

(当館学芸グループ課長)